2019年(平成31年)1月13日(日曜日)　日本農業新聞

書評

龍谷大学農学部教授
淡路和則

未来を耕す農的社会

蔦谷栄一・著

◇出版＝創森社
◇価格＝1800円
◇つたや・えいいち　農的社会デザイン研究所代表

理論、実践の両面で道説く

「農」を市場世界の農「業」としてだけでなく、多面的価値を発現させる諸活動として包括的に捉え、それが未来社会をデザインする力をもつ――。そうした「農」の可能性を著者は2年ほど前に『農的社会をひらく』で提起した。それに続く本書は、その農的社会へ進むための指南書といえ、三つの特徴を持つ。

第一は、情念に傾かない理論武装である。農業の捉え方を概念図で解説した上で、経済学史や思想史をたどりながら農業の位置付けを整理している。事典的な読み方も可能である。

第二は、農の営みの主体と協同に力点を置いた考察である。狭義の農「業」においては経済原理から大規模法人経営が適合的であるが、農という広い視野で見れば小規模家族経営、兼業農家、自給的農家も重要な担い手となる。地域農業を形成するには、こうした多様な主役によるコミュニティーが重要であることを説き、農協論にも言及している。農的社会の主体形成論といえる。

第三は、農的社会の輪郭と実現に向けた道筋を踏み込んだ形で示し、自らの実践を紹介している点である。手取り足取りのハウツー本や事例集ではなく、実践から抽出されたエッセンスが語られている。

本書を読んで、ある言葉を思い出した。フランス人から聞いた「社会が大きな問題に直面したときは田舎を思い出せ」という言葉である。現代社会の病を癒やして未来社会を描くには、農の営みを見つめ直し、関わる者が互いにつながり合うことが求められる。

本書は、そのためのマニュアル本ではなく、主体的に考えながら歩めるように課題を投げ掛けて背中を押す書である。理論と実践の両面から世界を見渡し、農的社会への道を説く力強さがそこにある。